

## 2018年MGCバルト三国公演旅行記

大畑久子

私がMGCの海外公演に参加させて頂いたのは、2012年のオーストリー、2015年の中部イタリアに次いで今回が3回目でした。前2回の公演旅行は既に訪れたことがある国なので、ある程度の知識はありましたが、今回は全く初めての国々でBSプレミアムの放送や本・資料などで概要を知り、期待と少しの不安（特に言葉）を抱きながら9月13日9:50発フィンランド航空のFin Airに乗り込みました。北欧の人々は大柄な方が多いせいか、エコノミークラスの座席は日本の航空機に比べるとやや広く感じました。

さて、まずは日本との時差が6時間なので同日の13:50フィンランドのヘルシンキに到着、専用バスでホテルに向かう途中、シベリウス公園や、ヘルシンキ大聖堂等、簡単な市内観光をしました。そして翌9月14日、早朝7:00にロビー集合、再びFin Airでリトアニアの首都ヴィリニウスへと向かいました。

旅(travel)の語源はトラブル(trouble)だと聞いたことがありますが、ここで**第一のトラブル発生!**ヘルシンキからの飛行機は小型のプロペラ機でちょっとした不安がよぎりましたが、案の定、**ヴィリニウス**の空港に着くとMGCの一行40名中、22名のスーツケースが未着でした。MGC一行の内、わずか18名の荷物だけがターンテーブルから出てきて、その後は止まってしまい皆途方に暮れていると、添乗員の話ではヘルシンキにそのまま積み残されているとのことでした。次の便で届くという保証もなく、仕方なく観光予定になっている郊外の「**トゥラカイ城**」に向かいました。



<トゥラカイ城>

湖に面したそのお城の美しい景観を目の前にしたレストランで昼食をとり、ワインやビールを飲んだ後、一気に落ち込んだ気分が上昇、一行の顔も晴れ晴れとしてきました。食後にトゥラカイ城に入場、14世紀後半に建設され、その後ポーランドの支配下で廃墟となり1987年に復元された城は、美しい赤レンガで跳ね橋や城壁、螺旋階段があり、博物館になっている内部を徒歩で見学しました。

その後バスでリハーサル会場に向かう途中、渋滞もあって、主人はスーツケースに「居処」で使う鈴と譜面台を入れていたのでやきもきして浮かない顔をしていました。そのうちに添乗員の河村さんから積み残されたスーツケースがホテルに届いているとの吉報が入り、バスはホテルへ。無事、それぞれの荷物を確認し、団員の皆さんは練習に必要なものを取り出してそのまま会場へ徒歩で向かいました。

同行の家族（奥様方）はバスで簡単な市内観光へ向かい、**三つの十字架の丘展望台**や**杉原千畝の記念碑**を訪れました。ここではバスから降りて徒歩で観光したので、何人かの奥様達と親しくお話をさせて頂きました。お互いに知り合う良い機会になったと思います。

この日のホテルは2泊なのでやっとスーツケースの中身を出すことが出来、ほっと一息つきました。今回の旅は早朝の出発が多く、ホテルでの朝食もcontinental breakfastなのでゆっくりと味わう余裕もありませんでした。翌9月15日は9時から市内観光に出発なので比較的ゆったりと朝食を取れました。

市内観光では、ヴィリニユスの中心にあり、街のシンボルとされる**大聖堂**（ギリシャ神殿の様なファサード）や**聖アンナ教会**（15世紀末建設の火焰式ゴシック建築で、1812年ロシア攻撃途上これを見たナポレオンが「わが手に収めてフランスに持ち帰りたい」と語ったほど美しい）等を徒歩で見学しました。

昼食後、団員の皆様はリハーサル会場へ、15:00から現地合唱団とのジョイント・コンサートが始まりました。



< 聖アンナ教会 >

バルト三国は合唱が盛んで、民族が合唱を通じて団結し、ロシアからの独立を勝ち取ったと言われるだけあって、合唱のレベルも相当高いという前評判でした。MGCの選曲も前半は日本の叙情歌で、後半に日本の民謡を持ってきたのが大正解で最後の「居処」が終わると大喝采が沸き起こり、しまいにはスタンディング・オベーションになりました。開演前は、お客様がどの位入るか判らなかったのですが、同行の奥様達があちこちに座って“さくら”になろうと話していたのですが、開演が近づくと次々に現地の方々が入ってこられて私達“さくら”はあえ無く散った、というか席を譲ってとうとう2時間ほど立ちっ放しでコンサートを聴くことになりました。私はカメラでステージの団員の様子を撮影したりしながら、会場のお客様の表情も捉えることが出来て返って良かったと思えました。拍手をしている方達にカメラを向けるとにっこりと笑顔で応えて下さり、皆さんが本当に満足している様子が見てとれました。



< ヴィリニユスの聴衆（スタンディング・オベーション） >

共演したリトアニアの男声合唱団“ヴァルパス”は、噂に違わずダイナミックな声とハーモニーでさすがに合唱国の方達だと思いました。

終演後の懇親会では、この合唱団の団員数名と話が弾みました。その中の一人（70代後半）の方が主人と同じテナー2のパートでMGCの合唱では特に「居処」が気に入ったと言っていました。何故なら、1965年に「居処」に似た“Voices of Night”（英語名）という曲を歌ってこの合唱団が2回 Grand prix を取ったと誇らしく話して下さいました。和やかな懇親会でMGCの皆さんも笑顔で談笑されていました。正に音楽は国境を超えるという実感を深くしました。



<ヴィリニユス懇親会にて>

9月16日は早朝、次の演奏会を行うカウナス（かつてはリトアニアの首都であった）にバスで移動、**杉原千畝記念館**（旧日本領事館）を訪れました。彼が第二次大戦中に迫害を逃れてポーランドからやって来たユダヤ人の為に日本通過のビザを発給した事務机を見て胸にこみ上げる熱いものを感じました。机の上には三人の息子さん達の写真が飾ってあり、そのうちの一人から「お父さんはあの人達を助けてあげないの？」と聞かれ、外務省の訓令と自身の思いとの葛藤に区切りをつけてビザ発給に踏み切ったということがビデオで語られていました。



<杉原千畝記念館 デスク>

そしてMGCは15:00~17:00まで、現地の合唱フェスティバルに参加、団員は13:00からリハーサルに向かいましたが、私達もリハーサルの最後の方に間に合い、「髪」を聞きましたがその美しい響きに感動しました。演奏会はこの時も満員の盛況で私達同行家族はまたしてもお客様に席を譲り、2時間余りを立ったまま聞きました。お客様の反応はとても熱心にMGCの合唱を聞いて下さり、第1回目の演奏を上回る出来栄でした。今回も勿論スタンディング・オベーションで同行家族として何とも誇らしく感じました！共演した現地の合唱団は、2団体でいずれも混声合唱団でした。最初の合唱団CANTICAは若い女性が大半で3名の若者が中央で歌い、これが美しい混声になっていたのには感心しました。もう一つの合唱団CANTATE DOMINOは、全員が頭巾付きのベージュの僧服の様な出で立ちで宗教曲を歌いましたが、始めは舞台正面に飾られた大司教の絵に向かって全員が後ろ向きで歌いだしたのが印象的でした。



<カウナス合唱フェスティバル>

9月17日はまた早朝、バスで国境を越えてラトヴィアに向かう途中、リトアニ

ア北部の都市**シャウレイ**近郊にある**十字架の丘**を訪れました。最初の十字架は1831年の帝政ロシアに対する蜂起後に処刑や流刑にされた人々の鎮魂の為に建てられ、ソ連時代に何度も破壊されたが人々が新たな十字架を建て続け、今では数えきれない数の十字架が丘を埋め尽くしています。なだらかな丘を登っていくとマリア像や移民の人々が立てたと思われる十字架や日本語で「世界平和を！」と書かれた十字架などが目を引き、抑圧された民族や独立戦争の死者の鎮魂、平和を祈る者の聖地となっているそうです。

その後国境を越えて**ルンダーレ**に入り、昼食をとったレストランで**第2のトラブル発生!** チロル風の可愛いレストランでしたが、2階の私達の席に料理が運ばれてくるのが非常に遅く、妙齢の美人ウェイトレス2名が代わる代わる両手に料理のお皿を二個ずつ持ってしゃなりしゃなりと階段を上がっては下りを繰り返して、皆のお腹の虫がグーグーと音を立てだした頃やっとランチが始まりました。30分位待たされたのでしょうか? そして丸テーブルに座っていた6名の内5名と他に1名の方がサラダに入っていた赤紫色の葉を食べたところ、後で嘔吐やお腹の不調に苦しみました。聞く所によるとそれはビーツの葉だという事でした。不調を訴えた方達は途中バスを止めて外の空気を吸ったりして夕方7時頃、何とか無事に**リガ**に着きました。

9月18日は、各自チェックアウトを済ませ、9時にはバスで**リガ**の市内観光へ向かいました。**リガ**はバルト三国の中で最古かつ最大の都市で世界遺産に登録されています。これまで訪れたリトアニアの都市はロシアの影響で地味な建物が多く、**リガ**に来て初めて北欧の都市に来たという感慨を覚えました。

13世紀末にはハンザ同盟に加盟し、急速に発展したこの町は“**バルトのパリ**”と呼ばれたそうです。新市街の**ユーゲントシュティール**(アールヌボワ)様式の優美な建物には思わずカメラを向けたくなる魅力がありました。**大聖堂**や**聖ペテロ教会**他の観光をして、昼食後、再び国境を越えて**エストニア**の**タリン**に向かいました。所要4時間の行程でしたが、3時間走るとドライバーを30分休憩させるという規定があり、カフェでティータイムを取り、19時頃**タリン**に到着しました。



<ラトヴィア国旗とリガの街>

9月19日は、午後2時過ぎまで自由行動だったので、加藤さん夫妻の提案で松田さん夫妻、私達の6名でカドリオルグ（タリン中心部から約2 km）の宮殿と公園、KUMU美術館（2000年開館）を訪れました。ロシアの支配時代やヨーロッパの絵画、その他美術品が数多く展示されていました。タリンの町中にカドリオルグ300年記念美術展の旗がひらめいていたのがここだったのかと後で判りました。この宮殿は1718年にピョートル大帝の命令で妃エカテリーナ1世の為に離宮として建てられ、今年で丁度300年に当たり大々的に宣伝していたのでした。カドリオルグとは皇帝の妻エカテリーナ1世に因んで、エストニア語で（エカテリーナ=カドリ）なので“カドリの谷”と呼ばれたそうです。広大な美しい公園や宮殿に隣接して大統領府の建物があり、翌日偶然皆でこの地域を再訪しましたが美術館に立ち寄る時間はありませんでした。



<カドリオルグ美術館>

15時からのリハーサルを経て、18時からローチ・ミヒクリ教会でタリン工科大学OG合唱団とのジョイント・コンサートが始まりました。皆さん体格が良く、迫力のある女声合唱を聞かせて下さいました。今回は教会で椅子も大勢座れたので、久しぶりに着席してMGCの合唱を聞くことが出来ました。抒情歌はハーモニーが美しく会場のお客さんも静かに聞き入っている様子でした。

日本民謡や居処はダイナミックなリズム感で、皆さんも喜んでいらっしゃる様でした。盛大な拍手を頂きましたが、教会だったせいか、スタンディング・オベーションにはなりませんでした。終演後の交歓会では、流石に工科大学出身の方々なので英語が上手で日本にとっても興味を示して下さいました。年配の女性が多かった様ですが中には若いお嬢さんも数人いらして、話をした彼女達からはMGCの合唱をととても気に入ったと言って頂きました。お聞きした所では、独立後EUに加盟するに当たり、小学校から英語教育に力を入れてきたそうで、ほとんどの方に英語が通じたのがなるほどと思いました。

さて、最終日の9月20日は9時からタリンの市内観光で世界遺産の歴史地区をバスで巡りました。トーンペア城（現在は国会議事堂）の真向かいに、かつての支配者だった国の壮大なロシア聖教会の**アンドレ・ネフスキー聖堂**がそびえているのを見て、歴史の変遷に思いを巡らせました。タリンはロシア、スウェーデン、ポーランド、更にはデンマークにより征服されてきた為に、様々な建築様式で建てられた建物があるそうですが、それらが原型を維持していて、しかも大部分の屋根がオレンジ色で美しく調和した旧市街を形作っていました。



<タリンの旧市街>

昼食後自由行動で訪れた旧市街の散策では、のんびりと時間を気にせずに花市場や静かな街並みを楽しみました。その後、聖ニコラス教会にある有名な絵、“死のダンス”をじっくり鑑賞しました。この絵はタリン生まれの画家、ベルント・ノトケが15世紀後半に描いたもので、左から法王、皇帝、皇女、枢機卿、国王、以下、庶民や農民へと続く人々がそれぞれ死神に手を繋がれてダンスを踊っている構図で、元は幅30mにも及ぶ大作でしたがリューベックにあった他の部分が戦火で焼失し、ここにある部分(1.6m x 7.5m)が現存する唯一の作品だそうです。中世の思想で生きる者すべて死すべき運命にあるという戒めを表した絵で、必見の価値があると思いました。



<死のダンス>

そしていよいよ、旧市街のレストランでフェアウェル・ディナーとなりました。チャーミングなレストランでワインを頂きながら、無事にバルト三国演奏旅行を終えようとしているひと時をいくつかのテーブルで其々談笑して、最後に「遙かな友へ」を合唱してお開きになりました。

翌日の9月21日は日本に直帰する人、延泊でロシアのサンクトペテルブルクに行く人、ノールウェーのフィヨルドのツアーに行く人の3グループに分かれました。私達はノールウェーのフィヨルドを選びました。まずは、エストニアから9階建ての客船でフィンランドのヘルシンキに行き、そこからノールウェーまで飛行機で飛びました。ベルゲンに着くと初めて雨に降られ、私は風邪気味でホテルに留まっていたのですが外出した人達は嵐のような悪天候に見舞われ、びしょ濡れになったそうです。

翌日はすっかり晴れて青空のもと、広いフィヨルドを3階建の観光船で巡り、壮大な景色を楽しみました。フィヨルドはV字型の切り立った風景を想像していたのですがガイドさんの話ではU字型で両岸は幅が広く、至る所に前日の雨で水量が増した滝が流れていて、中には東山魁夷が描いた美しい滝があり、岸の天辺からフィヨルドにとうとうと注ぎ込んでいたのは壮観でした。また次の日はバスツアーで、街の気温は16℃位でしたが、次第に山の上の方に上っていくにつれ、白樺林の黄葉の秋景色から高度1,200mの所では緯度が高い為、一面の銀世界で雪に覆われた地面には建物がなく、何処か別の惑星に行った様な錯覚に陥るほどでした。バスの外には出ませんでした。外気温は3℃ということでした。この頃日本では32℃～33℃と猛暑が続いていた様です。



<フィヨルドの観光船>



<東山魁夷の描いた滝>



<フィヨルドの瀑布>

そして約2週間の旅を終えて9月25日無事日本に帰国しました。この日は恵みの雨で気温が下がり、極度の気温差で身体的に打撃を受けることなく我が家に帰り、ほっとしたことでした。

今回 MGC のバルト三国海外公演に同行させて頂いて本当に貴重な経験をする事が出来ました。200年にもわたりロシア始め、様々な国々の支配を受けた人々がまだ貧しくても独立した自由を真の意味で謳歌しているという実感を得ることが出来ました。リトアニアやラトヴィアの国旗には赤が使われていますが、この赤は独立を勝ち取る為に流された人々の血の色だと聞いて感動しました。エストニアの国旗には青と黒と白が使われていますが、ガイドさんの話では黒は暗黒時代の悲しい歴史を忘れないという決意を示しているということでした。エストニアがその様な決意のもとに世界でも抜きん出た IT 王国となったことが頷けました。